Onomatopoeia 2005
18歳未満購入禁止
PANGYA!
クーにかたせてくれるひと

コルン
スルルル
コトーン
ナイスパット！
あちゃー また一打差で負けたか
よーし 今日はこのくらいで上がるとすっか！
おつかれさまー
+4

じゃ、チーム戦で一汗かいた後はクーちゃんと個人対戦といきますか！
よろしく～
…着替えちゃダメ？パンカーショットとかしてるし、汚れ…
いいのいいの～
よろしく！？
そうそう、気にしない気にしない～

はんしゃきょうも
クーちゃんに
打ちっぱなしで
思いっきり
かっとばして
もらおうかな〜
好きでしょ？
クーちゃん
このクラブ
いつもおいしそうに
しゃぶってるもんね
そんな…これは
あんたらが…あっ
なに？2本いっぺんに
欲しいの？
さすが常時
パンツ丸見えな服
着てるだけあるね

しゅっ
しゅっ
あれー、なにかここシミになってるな
ちょ、いや
おしっこもらしたの?クーは子供だなあ
あっ♡
ジュッ
ズリ
ズリ
ち、ちがおもらしなんか
おもらししゃなきゃ何だろう?
どんどんあふれてくるんだけど
うわ、指一本できつきつだ
ヌリュ
ヌリュ
うあぁっ
くぱぁ

でもクーはやーらしいから、こんなちっちゃいオマ○コでもぜんぶ飲み込んじゃうんだよな
ま、僕たちがさんざんほぐしてあげたからってのもあるんだけどね
はー
チュプ
そうだな　お、入る入る
くあー、ぎゅんきゅん締め付けてくる♥
いいなあ　クーちゃんと同じチームな上に一番目にハメられるんだもんなあ
グポォッ
へへ、悪いな
あっ
うあ
んあぁっ
ぬぶぶぶ
ぬぶ

あ やべ、もう出そ…！
!!
ま いいや 第二打うちまーす
くーん、ああ♡ ふう
ふあぁ～♡
あ…
お前、そっちはあんまり余裕ないんだな
とろ。。。
ほっとけ！
ぬぽぉ

ずにゅ
じゅっ
お、ハメられながらもお口に集中できてんじゃん
舌がからんで口も出しちゃいそ
ずっぽ
フェラはアップグレード完了かな？そろそろ
おま○こもずいぶんこなれてきたし そろそろアナル値のアップかなっ
バーカ 考え方が短絡的だっつうの
ずにゅ
ぢゅく

よーし 俺も膣内に
出しちゃうぞ
ほっ、ほっ、はー
うあああ♡あ…
ひゃあん♡♡
お、クーちゃんいまので
かなりイッちゃった
みたいだね
膣内射精したそばから
ふき出てきてる
けどこれも
クーちゃんのため
だからね
ドクッ
グチュ
グチュ
グチュッ

はぁ
パンヤで勝つためにはいろんなテクニックが必要なんだから
で、でもぉこんなの♡
こういったことにもちゃんと慣れとかないと
ズポ
はぁ
あん
ジュプ
ジュポ
はぁん♡
どんなコースやライバルが出てくるかわかんないんだから
みんなで上手くなっていかないとね一
ずぷっ
ぬぢゅ
うあ♡ひゃ
ああうん♡

グプッ
はあっ
いくよーっ♡
クーちゃん::っ
ずぷ
じゅくっ
あっ
ズボ
じゃ、俺もおま○このアップグレードに協力、と！
はっ、はっ、ふう！っ！
ズププ
んあ♡
ひあっ
はあ…

くあー、フェラの時から
我慢してたから
すげぇ射精てくるわ
ビュッ
ドクッ
ビュルル
射精しきるまで
もうちょっと、
かるくかきまわさせてね
グリ
くふぁ♡
ふぅ、たっぷり中出し
ごちそうさま♪
さて、それじゃメダル稼ぎに
大会のエントリーでも
してくっかな
あ、おれもおれも！
いいよなー、お前ら
当たり前のように
メダル取れて
ぬぽぉ
END

没ラフやらくがきなど
漫画に使えなかったラフ絵がけっこう
残っているのでここらでちょいとリサイクル(ッ)
クーは描き慣れるまでに時間がかかって
(というか、今も慣れてない)書きかけのものが
けっこう出たんですよね。つり目ロリおそるべし。
体つきかどうにも
安定しないなあ

ロロがきてからのパンヤ
クーの陰にかくれてひっそりと
実装された感のあるロロ。
能力もスピン＋1カーブ＋1と微妙な上に
クライアントを落とすバグを手土産に
やってきたせいで一部から
不評を被ったりもしましたが、
ウチではレベル4まで育てるべく（ぺんぎん）
トコトコと使ってます。
しょんな
オーケー
まあピピンもポンタもティッキーも
レベル4までいってしまってるので（ぺんぎん）
そんなにしんどいことでもないとは
おもいますが、せめてコントロール＋1が
ついててくれればなあと
願うことしきりです
てか、ロロは頭の羽根っぽいのがよくわからん（ぺんぎん）

「ほら 早く！着替えさせてくれるんでしょ？」
そういって彼女は私を個室へ誘い込む。
新しく買ってあげた衣装が、よっぽどお気に入りのようだ。
「今度の大会はチームでやるんだから
衣装も出来るだけおそろいの方が
いいもんね！ね、おじさん♡」
―俺はこれでもまだ、20代なのだが――

「きれいに着せてくんなきゃ 脱っちゃうよ」
表向きは衣装のことを話しているが
彼女の興味は別のところにあるようだ
ひとまわり歳が離れてはいるが——
当然俺も、それを察して
スル…
「あ…そこも—脱がす—の？」
「あ…やっ」
「あん♡」
愛撫をはじめる

「ん　もっ　いやらしい手つき〜」
そういいながらも　甘えたような顔つきで
悪戯たけしく足りなそうな表情だ。
手を止めて優しく椅子に座らせると
「ね　もっとさわって」と
自分から指で秘所を見せつけてくる。
「今着替えたら　新しい服汚しちゃいそっだから　ね？」

あ♡ああっ」
「はあぁ　はぁ」
に愛撫を続けているうちに
秘穴がやわらかく開き出す。
ても挿入れてしまいたいが、
かけて　穴がほぐれるのを待つ
そうしているうちに彼女が囁きかけてきた。
「ふあ　さわるだけしゃ　足んないよう
おしさぁん　んあっ　あ♡ああ♡♡
クーのおあな、おじさんので一杯にして　♡」
その言葉を受け入れるのに　時間はかからなかった

「くあぁっ　んぁ♡　んぁん♡」
彼女の鳴き声が、水気を含んだ
肉のぶつかる音とともに、部屋中に響く。
「はっ　あ♡」
「ああん　は♡あ♡ああっ♡」
あれだけほぐしたにも関わらず
まだたっぷりの抵抗感が
穴から感じ取れた。
それでも構わず突き続ける。
「はん　あ♡
くぅあぁ♡♡♡」

「ね、もいっかいね、もう1っかい」
男の生理を無視して、艶声で更なる快楽を要求してくる
服のことなどすっかり忘れてしまっているようだ
萎えかけた陰茎をむりやりと彼女に挿込むと
「くあ～んっ♡♡♡」
待ってましたとばかりに締め付けてきた。
射精したばかりの陰茎が、彼女の膣内でまた大きくなる
「くっうん♡だから、おじさん大好き　♡」
俺はこれでもまだ、20代なのだが――

Onomatopoeia 2005